

全国同人雑誌評

北の同人雑誌評

妹尾雄太郎

●「ざいん」27号（室蘭市）

こしばきこうの評論「詩と小説の彼方から——今や、地方同人誌は消滅する運命か——」。筆者は寺山修司に師事し、北の地で25年間寺山作品を舞台化しつづけているという演劇人であり、詩や小説も書いているという人である。たとえばウクライナへの侵略戦争や、東日本大震災に対して、非当事者はその痛みに共感し、悩むことはあったとしても、それを「語るための場」がほとんどなかったのではないか。「今や、ツイッターやSNSを通しての『のぞき魔』」的な状況の中で、「地方の同人誌に所属している人たちは」「果たして切実さと誠実さを持った語り部であったろうか」と問う。そして「身の回りの思い出ごとや世間の井戸端会議の発表に何の意味があるのだろうか」「もう一度、基本に立ち返り、なんのために詩や小説を書くのか？ それは本当に真実を見つげるための表現なのかを、自分の生き方として自分の思想として問い続けたいものだ」と主張する。至極まっとうな意見である。こうい

ういわば青臭い論議をもう一度同人雑誌という場で熱く戦わせる必要があるのではないかと主張と読んだ。ただ、同人の高齢化も要因として衰退期に入ったようにみえる同人雑誌の世界でそれがどこまで可能かという思いは残る。障壁が高いがイキのいい若手の加入が待望される。こしばも「偽りだらけの世の中から逃げ出した若者よ、戻っておいで！」と呼びかけているのだが。

同志、井村敦「大門通り——振り真名」。大正時代の「六蘭」という架空の港街を舞台にした物語。外国の大型貨物船が入り出すこの街には幕西町と言う楼閣のある地域もあり、英語、独語、露語などか飛び交う、近代と前近代が交錯する街である。津山達磨はその幕西町に下宿する六蘭中学の英語教師である。英会話力を磨くために達磨はキリスト教教会の神父として赴任してきたロンと親しくなり、勤務校の英語の授業も時々手伝ってもらうようになる。そんな折、達磨は幕西町の裏道で六蘭の高等女学校の生徒であるまき乃と知り合う。その養母はまき乃が学校を終えたら芸妓にしようとしているが、まき乃は英語の先生になりたいと考えている。それに同情した六蘭中学の生徒である礼治はロンの手を借りて、二人で駆け落ち的に外国船に潜り込み、香港への密航を企てる。協力を求められた達磨は逡巡するも断るのだが……といった展開。会話文の脇に英文やカタカナ英語の訳語表記を付けるというのが新しい

趣向である。異文化、異言語が交錯するこの港街の混沌とした時代の空気がそれによってよく伝わってくる。

井村敦は「大門通り——『点消夫と電灯夫』」で二〇一五年度の北海道新聞文学賞を受賞した人である。「六蘭」を舞台に幕末から明治、大正にかけての庶民の様々な生き様を幕西町の入り口に建つ「大門」が見下ろすという枠組みの作品構造において活写した作品を多く発表しており、その筋立ても自然でうまい。この「大門通り」の短編連作小説群を是非一冊にして刊行してほしいと願っている。

●「文芸誌 視線」11号（函館市）

この誌は評論が充実しているという印象が強い。近藤典彦「時代閉塞の現状（強権、純粹自然主義の最後及び明日の考察）」を読むはこの難解な啄木の評論を「分かりやすくなんとか紹介したい」として、大胆に、五章からなるこの評論中の第四章に絞り込んで読み解くという手法をとっている。この啄木の評論が書かれた時代、社会の背景を整理して示した上で、啄木の言う「明日の考察」について「『明日』とは、青年たちの『明日』つまり今の老人たち」権力者たちの世代に今の青年たちが取って代わる時代」「『次の時代』を意味します。その『次の時代』つまり数十年後の日本のことを『時代閉塞』の今、『考察』しようというのです」と解説する。そして「組織的考察」という言

葉に言及し、当時の啄木が読み漁った「未来社会論や社会主義運動」について述べ、「『実務家』つまりリアリストの啄木はクロポトキンの理想（新社会が成立すると同時に人々は「相互扶助の感情」にみだされた人間になる、など）の非現実的な面もよく見ていました」と指摘して、堺利彦が編集した「社会主義研究」の合本中、啄木が関心を持ったのは社会主義理論より労働運動の姿をとった実際の社会主義だったとして、具体的には一八八九年に結成された「国際社会主義者大会（第二インターナショナル）」の「『実際的な思想と活動』であったとする。そこで決議された労働者の保護を目的とする内容を紹介している。労働時間を一日八時間とする、一四歳以下の労働の禁止、労働者に週三六時間の休憩時間を与える、政府は監督官を置き、すべての工場を十分に監督させる、すべての青年男女に普通選挙権を与える、一六歳までの少年男女に義務教育を、小学校生徒に給食を、最低賃金の国際的な規約を作って保障せよ、等々の内容で、多くは現在の日本では不十分なながらもほぼ実現しているが、当時としては「夢のような」要求である。その上で、近藤は「『時代閉塞の現状』の呼びかけ、強権への宣戦の第一歩は『全精神を明日の考察——われわれ自身の時代に対する組織的考察に傾注』することだ、と言った啄木の真意が見えてきました」と述べる。『時代閉塞の現状』の「明日の考察」という言葉の真意の読み取り

の一つであり、確かに具体的でわかりやすいが、啄木研究の中でこの論考がどのような位置を占めるのか、ぼくにはわからない。

同誌13号の「編集後記」で編集体制が新しくなったことを告げ、「地方でしかできない文芸誌にしたい、中央文壇には出来ない作品の発表を、この二つのことを常に中枢に置いてきた」とある。若々しく頼もしい言葉である。四篇の小説が掲載されている。

じんひさし「観光望遠鏡」は幻想性を帯びた一風変わった不思議な作りの作品である。峠の上の展望台で観光望遠鏡を覗いている時、突然その視界の中に若き日の自分の姿が現れる。岩場の頂上のようなところを登り、そこに「綺麗に揃えられた一足の真新しい男性用革靴」を見つめる。崖から投身自殺したのかなどと想像していると、そこに赤いつば広の帽子を被った若い女が現れる。とその時「女が風に乗って確かに空中に跳んだように」見え、下を覗き見ると海にその帽子が浮かんで揺れている。その後、北陸の自殺の名所の岬を旅した時に男はその赤いつば広帽の女と再会する。女の父親はそこで投身自殺をしたという。その女はその後男の妻となるが、その妻は三陸海岸を一人でレンタカーで旅していて大津波に巻き込まれ行方不明になる。「沖の方からこちらへ流れてくるものがある。赤い帽子、彼女が被っていた赤いつば広帽子だった」。この赤い

留萌文学



きたか、どう生きるかにあるとも思うので、そういう困難な状況を生き抜いた人間の現実を描く丸山の一連の作品は「日級地帯」を代表作としてこの先も評価を受けると信じる。丸山作品はその舞台にな

った土地に誘う魅力を持っており、ぼくは何度か作品の背景になる風土の感覚を確かめにその舞台になった土地に足を運んだのであった。作品のラストの「親父が開拓した国境を訪れると、そこは昔の面影はなく、若い樹木の森になっていた。そこを眺めていると、瘦身の親父が、大鎌で根曲がり笹を切り倒している姿が、陽炎の中に揺れていた。やがて力尽きた親父は鎌を振り上げたまま消え去って行った。」というラストは開拓の挫折という意味では現実的には敗北かも知れない。だが、国策として行われた北海道の戦後開拓の人々の苦闘と悲劇の歴史の闇に光をあてたものとして丸山の作品群は高く評価できるのではないか。

●「札幌文学」93号（札幌市）

この号は代表だった田中和夫の追悼号。海邦智子「空中観覧車」はその田中を作中人物のモデルの一部として取り込んだ（「同人近況（1）」作品。作品の最初あたりに二つの謎が仕込まれる。一つは「水色の小さなキャリーケー

帽子は何の象徴だ、と読みながら立ち止まってしまふ。前半に「男の中ではすでに加齢による記憶データの破壊がはじまっていた」「男のこれまでの人生模様が無意識に書き換えられ、今では、何が真実で何が妄想なのかわからなくなってきた」という描写があり、後半に現在、男は介護施設に同居しているような描写が出て来て「私がいるから世界がある。私が消滅したとき世界もまた消滅する」という思念が出て来る。現実の像の歪み、死の影と記憶の揺らぎ。朦朧としていく記憶の揺らぎの中で、女のつば広帽子の赤さだけが確かな生の記憶として刻まれているのだと読める。男にとって自分の脳内でその赤いつば広帽子がどういう記憶の文脈に書き換えられても、その赤さだけは自己の生の確かな記憶の核にある。だがしかし、それも死によつて消滅してしまうのだろうか。読み外しているかもしれないが、とりあえずそのように読んでみた。

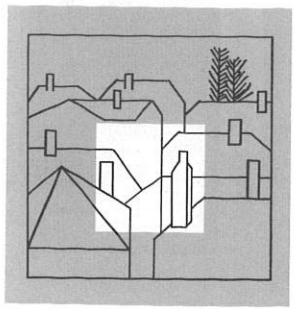
●「留萌文学」108号（留萌市）

残念ながら今号で終刊となった。丸山靖生「変転」は一貫して書いてきた戦後の北海道開拓移民の信砂御料ものひとつである。視力が衰えて、難儀しながら創作を続けているらしい丸山の執念を思う。こういう大地や自然と向き合い、闘う人間の開拓苦勞的な愚直なりアリズムはもう古いという評価を下す人もあるかもしれないが、ぼくはそうは思わない。人間の基本はその時代の状況下でどう生

スのハンドルを握りしめて泣きじゃくる梨花」を駅に送るシーン。泣きじゃくる理由は何か？ 列車でどこに向かうつもりなのか？ 第二は梨花がアルバイトする喫茶店を時々訪れる白髪交じりの男とお互い親しげに魅かれあっているかのようなその関係の謎である。その興味で読者をぐいぐい引つ張っていく。ネタバレになるのでそれ以上は書かないが、「私が乗務する最終列車の切符です」という言葉に出くわした時、その先の展開はおよそ読めたものの、ぼくは不覚にも思わず涙を流してしまったのである。かつて国鉄の車掌であった田中さんの最終乗務時の写真を見たことがあったような記憶も重なったのであった。「リストアート」という言葉をキーとしたハートウオーミングな家族小説としてよく整った作品である。この号は田中和夫追悼号でもあり追悼文も多く掲載されているが、ぼくはこの作品を田中さんに対する最高の追悼小説としても読んだのであった。

札幌文学

第93号 田中和夫追悼号



2023年9月 札幌文学会

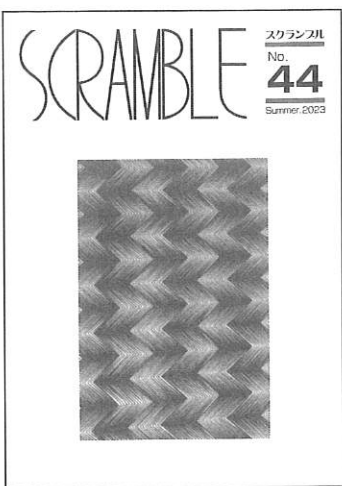
殿芝千恵

●「SCRAMBLE」44号（愛媛県）

読者のことをよく考えて作られた同人誌だ。一つずつの作品のポリリズムや世界観がバランスよく組み立てられて、編集者の手腕に感心させられる。活字に親しむ人口そのものが減少している中、手軽に読書欲をそそる作りはもつと評価されていい。

まず「袋井夫人」（武田久子）が面白い。改行が極端に少ない表現や畳みかけるような心情吐露はかつての野坂昭如を彷彿とさせる。しかし一人称で展開される小説は本人の心情表現だけでなく他者から見た情景描写がないと現実味を欠く。また、次々訪れる小さな不幸一辺倒の構成にも読者は飽きてしまうだろう。ここは不幸に翻弄されて逃亡する被害者で終わらず、悪意のリレー走者として堂々と退場してもらいたい。袋井夫人の常識あふれた善意が意図した悪意に変わる瞬間をもつと格好よく、颯爽と演出してもらいたかった。

「兄と妹の日」（木村涼子）も秀逸。身の丈に合わない口を組んだあぐく家族に見限られてしまった中年男の悲劇と言えはそれまでだが、生活に染み付く経済の情けなき



が非常に身に染みる。一見冷血漢に見える元妻の「もう聞わらないでほしい」という心情に潜むものは一体何なのか。最も近い他人である配偶者にそこまで言わせるドラマを読みたいと思わせる。

●「海」107号（三重県）

作品の味付けが多岐にわたり、読者を飽きさせない魅力がある同人誌。ともすれば得意分野や年齢層が重なりそうなものだが、ここではその心配は無用。買って損なし。

「不発弾」（国府正昭）は、まず構成が巧み。複数の人間の状況や物語を同条件のもとで羅列形式で繰り返していくのは読み手にとっては比較しやすく、わかりやすい。登場人物が増えても混乱せずに済む。また、いわゆる「神の目」である読者と同じ視線を持つ聞き取り役が民生委員というのも斬新で面白いし、タイトルの込めたいくつかの意味も秀逸。読者は不発弾をめぐる人々の歴史観や人生の重みに向き合いつつラストまで伴走する楽しさを味わえる。



は満たすかもしれないが、難解すぎて敬遠する読者の方が多いのではないかと。でも、小説のレベルの高さを見ればこれくらいの手腕がないと釣り合わないのかもしれない。中でも「雨とドア」（魚家明子）は群を抜く。真綿で締められるかのように集団の中のいじめの閉塞感や疎外感や絶望感が湿気を伴って精神を侵食してくる感じだ。命の危険はないが、確実に心を折られる生活を続けることで精神がささくれ、安定した眠りや食事の楽しみを失っていく恐ろしさがひたひたと近づいてくる。ここまでの盛り上げが上手すぎる分、ただ理解ある先輩の謎の行動でいきなり解決してしまうのはやや安直と言うべきだが、死者の存在とかかわっていくという設定や文章の雰囲気やよしもとななな「ある体験」を感じさせるが、オマージュに終わっていない魅力は、主人公の絵とドアに対する執着とも言える解

「湖賊の女房」（藤高あつこ）もとても面白かった。表現にはもう少し時代考証的な気配りが欲しい。話し言葉が現代風にアレンジされすぎていて、興ざめなところが気になる。あと荒くれ者に拉致された若い娘が頭領に見初められるまで結構な期間、貞操を保つというシチュエーションも現実味がなさすぎる。が、それらを忘れさせるほど前提としての設定は面白い。主人公の善良さあふれる思考回路の健全さもいい。殺伐とした時代の一服の清涼感となっている。平安末期の貧相な一乙女が、これからいかに肉体的・精神的に成長して、雄々しく楽しく伸びやかに人生を泳ぎきってくれそうな予感に大変な魅力を感じる。続きが早く読みたい。

●「北方文学」87号（新潟県）

評論部門はかなり読む人種を選ぶだろう。ニッチな需要



積の深さだ。これは読ませる力に満ちている。芸術家の衝動とはこういうものかと垣間見ることができたのは幸いだ。最後の最後でややセンチメンタルに徹してしまったのかもしれない。梨田老人の飄々としたセリフで、第三者の視点で終わった方が余韻を深められたのではないか。現実の中にあの世の存在を無理矢理引き出してしまったのがせっかく広げた世界観を逆に限定してしまっている。

あと、たまたまの芸術家繋がりなのだろうか、「夜のつづき」(柳沢さうび)も魅力的。終盤、急いで伏線を回収したかのような慌ただしさはあるが、全体的によく練られた構想だった。惜しまれるのは主人公、スオミの作品の魅力がほとんど解説されていないこと。彼女の一人称による心情表現は、読むものを惹きつける切なさや美しさがあるが、根底に流れる芸術家の衝動や情熱について語るべきことがなければ、単に幸薄い女性の独白に過ぎない。この作品の、この主人公にしか漂わせられない北欧の水や空気の匂いを読者の鼻腔に嗅がせておきながらの生殺し。母親の存在を語り部的に導入部で使っているのはとてもいい。なのに、母親の死にざまについて彼女の若さと美しさと貞操にしか価値を読み取れない形で収束させたのと同様、活かしきれていないのかもしれない。

●「組香」 8号(大阪府)

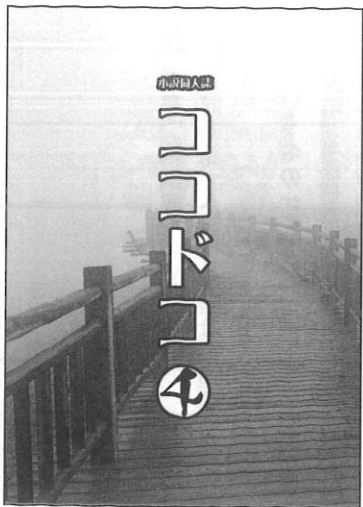
クラシックな装丁に似合わず、内容はたいへんアバンギャ

院が軟禁されているらしい。彼の紡ぎ出す世界観がどこまで現実なのか想像なのか、読む方はじわりとした不安感が纏いつくのを不快に思いながらも読むことをやめられない。

●「ココロ」4号(大阪府)

一読者として声を大にして言いたいのは、連載物が多いときは、掲載されている作品共通のフォーマットでのあらずし説明をつけてほしいということだ。あと、(これは執筆陣の自由とはわかっているが)作品全体の一部ではあるうが、一場面くらいは読者が没入できる場面を用意してもらいたい。続きを読めるかが未知数の身としては、とりあえずこの場で一回は楽しませてもらわないとやり切れない。勝手な感想だが、これは全読者共通のものだろう。

その点、つかみから読者を楽しませようとしてくれてい



ヤルド。小説執筆陣の質の高さに驚かされる。

「メスキュード箱のなかに棲むココロギの物語」(奥谷梅子)の面白さは、雌ココロギ/コロ美の登場場面がかなり説明くさくさでくどいのを除けば、展開は大変面白い。短編ですっきりと纏め上げ、最後のカタルシスまで持っていく表現力は見事だった。たかが虫けらとは言わせないドラマティック展開に脱帽。コロ美の退廃的な魅力に抗えない。ふてぶてしく美食と恋に耽る彼女の破滅をもっとゆっくり味わわせて貰いたいと思ったくらいだ。

あと、「アンティグア・バーブーダ」(安見二郎)は独白形式の小説だが、おそらくは中国に占領された日本という近未来の世界観が非常に現実味溢れていて面白かった。独自の隙間に緊迫感を持たせながら状況説明をしていく筆致に引き込まれてしまう。

井戸から見上げた空の描写のあっけらかんとした絶望感が良かった。主人公は精神を病んでいるのか、どうやら入

る「ここではなく、今日でもなく」(黒住純)は親切な執筆者といえる。ただ、冒頭の河童登場の場面は「えっ、なにぞに河童?」という疑問をもう少し味わわせてもらいたい。展開の速さに合わせて読者の感動やハラハラを切り上げさせるような書き方は冷たい。この傾向はほかの場面でも見られた。簡潔に、メリハリをつけてという趣旨かもしれない。しかし、主人公の思考をあえて空転させたり、停滞させたりして読者の感情と同じ速さで歩むのは大切だと思う。発想が面白いだけに残念に思う。

「細く長い路地」(田中さるまる)は、当事者にしかわからない不安や不満をひらひらと見せびらかしてくる。「ぼんこつ」(水無月うらら)が幸せを、安らぎを見せびらかしてくるのと対極にある。どちらも短編だが、各々の一人よがりともいえる世界観を貫き通しているのが心地よい。前者はちょっとした幸せを思い出から引っぱり出して雰囲気中和するような無粋はしないところがいい。鬱憤が積もると人はどうするのか、いつそれを爆発させるのか、実行できる者とできない者の紙一重をじっくり読ませてもらって楽しかった。後者も冷静に自分の幸福度を分析したりしない、主観だけで完結する幸福の強さを、根拠のない自信の揺るぎなさを読者に見せつけて主人公たちは鮮やかに退場してゆく。

森村和子

文芸同人誌 絵合せ



第6号
2023 (令和5) 年10月1日発行

●「絵合せ」6号(福岡県)
年三回発行の同人誌である。今回は、随筆一作、小説五作であった。

「『どん底』という名のDon」(野沢薫子) 昭和四十年代の終わり頃の長崎、遠洋航海漁船船員のたまり場の「バーどん底」のママは客を冷静に観察していた。中卒がほとんどの船員の中で高卒のトオルは都会のオフィスで働いていた新婚の妻エリコを「どん底」に連れて来た。ママは、何ごとによらず深く考えないトオルを思えば、エリコは苦勞するかもしれないと思いやった。エリコは社宅の管理人を押し付けられ、古手の主婦の攻撃にもあつたが、はね返すだけでなくカレー大会などを催し社宅を和やかにした。子供が生まれ、マイホームも手に入れたが、トオルはすべてエリコ任せでキャンセルにはまりこむ。エリコはトオルを見限り、子供を連れて企業の寮の寮母で生きることにした。ある日店を閉めたママが訪ねてくれた。農家育ちのエリコは、五年間交際した良家の相手から逃げてトオルと結婚したのだった。「思い切つてトオルと別れてやつと自分の人生が生きられるようになった」とエリコは話す。世間体を気に

いい。「俺」は生きる目的ができた。弓子を幸せにしてやりたい」と命が蘇る気分だった。

この作品の背景に作者なりの思い入れや意気込みがあるだろうことが推察されるが、それらの感情に引きずられることなく、体調の悪い時の弓子や、叔父夫婦の仲の良い様子などをありのままに描いている。さりげない筆致がすぐれている。

●「安曇野文芸」48号(長野県)

小説やエッセーだけでなく、ことばあそび、4コマ漫画、五行歌、短歌、詩、歴史小説などに、挿絵、絵、写真も配置されているが、工夫を凝らした編集により整理されて楽しいものになっている。作品の多くがどこかで安曇野に触れていて、郷土愛、安曇野愛を感じた。表紙にキャッチフレーズとして「みんなで創る郷土文芸誌」とあるが、まさ



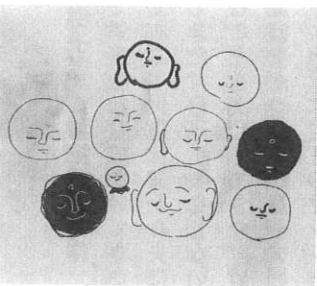
にその通りである。

エッセー「時代と生活を映す『一口付』」(椎名正昭) 「一口付」についての解説である。庶民文芸の「一口付」は明治から大正にかけて流行のピークを迎えたようだ。遊びで作る一種の短詩のようなものである。安曇野の大同神社に多くの作品が残っている。

体験記「生還」(青柳勲) 急性骨髄性白血病の闘病記である。自分の足で歩けるようにと、明るく生きた記録が絶筆となった。末尾に添えてある夫人の追悼文には胸を打たれた。

●「あらら」14号(香川県) 「穴」をテーマに小説四編、随筆一編で競作している。壁の節穴、妄想で浮かぶ潮干狩りのアサリの穴、畑の中のだる(肥溜め)の穴、能面の目の穴、洞窟、さらに土手の斜面の枯れ草に隠れた穴、浮世の息抜きの風穴、穴埋めクイズをしながら心の中の汚物を捨てる穴、すべてタイプの異なる作品でももしろかった。

あらら



2023年 14号

●「九州文学」582号（福岡県）

コラム「留学生余話」（白） 留学生のさまざまなエピソード九話を取りあげ、現在の留学生の実情を軽妙にまたユニモラスに伝えている。

「スラジ（朝陽）」（白水百合子） ネパールからの留学生スラジはホテル経営を学ぶために日本に来て、最初はがむしゃらに日本語を勉強した。生活費を捻出するアルバイトは留学性の命綱に等しい。バイト先の居酒屋の店長に執拗に嫌がらせをされ、アルバイトにも慣れてくると、ネパールと日本との経済格差にやるせない思いをして、生活がだれて来た。バイト仲間の女子学生の好意や日本語学校の先生の励ましをきっかけに立ち直り、もっと良いバイトを得て、再びホテル経営の学業に精を出す。このストーリーを通して、留学生の背景や宗教、厳しい生活などがよくわかる。



つと黙ってあげてもいいからわたしに感謝して生きてもらう」と婉曲に依子を思い通りにしようとする。依子は「報告書は民恵の気のすむようにしたらいい、恭一にはすべて話してあるから」と動じない。依子は結婚を機に、一日の終わりにその日印象深かった出来事を教え合う約束をしていた。十六年間恭一と二人で紡いだ時間は、報告書を「もういいわ」と捨てさせた。

まともに話し合おうとしても話がかみあわず、かえってこちらが悪者にされかねない、したたか毒のある厄介な民恵の人物像をうまく描いている。結婚について深く問いつけ、小説としての完成度が高い。ただし、蟻についての記述のある最後の部分は蛇足ではないだろうか。

全国同人雑誌評 五十嵐勉

●「文芸エム」12号（滋賀県）

「文芸エム」も初期の揺籃期から抜け出して、安定した雰囲気を持ってきた。巻頭の橋本綾「鳴る人」も散文詩のスタイルを取りながら、一つの象徴的な世界を構築し得ている。これを巻頭詩に持つてくるあたりも、誌としての成熟を感じる。この「鳴る人」は、これに留まらず、もう一歩進めて一篇の小説にもできそうな気配がある。試してみるのも、新世界へ繋がりがそうだ。

この号で特に光ったのは、資料構成「日本文学報国会」

「引っ越し」（森美樹子） 森村推薦優秀作 依子は早くに

父を亡くし、病院で栄養士として働いてきた。夫恭一は義母民恵の一人息子である。民恵は父から夫に代わっても常に庇護されて生きてきた。自己主張をしないで、曖昧な遠回しの言い方で望むことを実現してきた。けれども民恵の思い通りにコトが運ばなかったのが息子夫婦との同居だった。民恵の発言をきっかけに現在のマンションからケア付きマンションへ引っ越すことが決まった。民恵は婉曲に強く息子夫婦との同居を望んだはずだが、恭一が受け入れなかった。引っ越しは午後の予定だったが、民恵から引っ越し日になるべく早く依子に来てほしいと電話があった。二人が向き合う場面がクライマックスで秀逸である。早朝行ってみると義母は依子に一通の茶封筒をさりげなく見せる。興信所による婚前の依子の調査報告書である。依子は三年余り妻子ある男性と交際していたことが事細かに報告されていた。民恵は「発展家だったのね」、「とんだふしだら女」と蔑み「この報告書をどうしたらいいかしら」と依子の反応を楽しんでいる。男性と別れを決断した時に持ち上がったのが四十一歳の恭一との見合い話だった。会って五か月後には結婚した。依子は「ならばなぜ結婚に反対しなかったのか」と問い返す。「仕方がなかった。初めてだった。あの子が結婚してもいいと言ってくれたのは」と。依子は「どうして今になってこれを私に見せるのか」と問うと「ず

（構成／原浩一郎）である。一九四一年十二月九日真珠湾を奇襲攻撃して開戦した直後、文化面の統制として、日本帝国は文学界も戦争の方向へ一斉に向けていく。朝日新聞などマスコミも煽り、十二月二十四日「文学者愛国大会」が開催される。それに向けて吉川英治も鼓舞雷同する一文を寄せ「筆の穂の小さきいのちも召したまへ草木もこぞる今し御いくさ」と末尾に歌を添えている。

文学者愛国大会も奮っている。「国民儀礼」「開戦の勅書」朗読（高浜虚子）「祝辞」（安藤紀三郎大政翼賛会副総裁、谷正之内閣情報局総裁）「座長推挙——菊池寛」「宣誓——徳田秋声、佐々木信綱、水原秋桜子、白井きょう二、古屋信子、久米正雄、横光利一」「朗誦——土岐善麿、尾崎喜八、富安風声、佐藤春夫、高村光太郎」と、錚々たる作家、文学者が参加して戦争の方向を目指している。土岐善麿の歌も高らかに「無敵讃頌」として歌われている。「宣戦のおほみことの下るすなはちまさやかなりや敵艦全滅す」。また高村光太郎も詩を捧げ、「……彼らの鉄の牙と爪とを撃破して／大東亜本然の生命を再現すること、／これ我らの誓いなり……」と詠じている。

これによって「日本文学報国会」が発足し、翌年内閣総理大臣東條英機も祝辞を述べている。

またこれを称揚する一文を平野謙が『婦人朝日』の文芸時評で述べていることも構成されている。



戦争と国民及び文芸界の結託を過去の現実として提出した功績は大きい。文学者の判断が、戦争という大きな流れに巻き込まれるとき、いかに脆く、危ういものであるか、具体的な例として提示している。逆にこれに抵抗することが、いかに至難の技であるか、思い知らせてもくれる。振り返って考えてみれば、同人雑誌の表現の基盤は、ちょうどこの対極にあると言っている。国や流行や名譽や大義とは正反対にある位置から、自らの感受性と言葉に基づいて生きることを表出していくことにある。このことをあらためて思い直させてくれただけでも、この開戦当時の資料提示は深い意味がある。称賛したい。

「偽物」(原浩一郎)は、徹底したリアリズムで一つの放火事件の顛末を追っている、結局捕まって、罪に震える結末までを描いているが、作品として完成していない。この

追真のリアリズムは銀華文学賞作家としての力を感じるが、肝心の放火に至るまでの過程及び犯人の人間が描かれていない。なぜ殺すのか、なぜ火を点けるのか、犯人の残忍な一面はよく窺われるものの、その行為に至るまでの過程が見えないので、人間が浮かび上がってこない。放火と逃亡の現実を追ってくるものの、犯罪を犯す人間の深い姿が浮かび上がってこない。時間に迫られて書き殴ったような筆不足が感じられる。

●「アピ」14号(茨城県)

雲谷ひとし「快慶紀行」は、いい紀行文。鎌倉時代の仏像彫刻の二代巨匠、運慶・快慶のうち、快慶の仏像を追って、現代にその足跡を辿る紀行文で、興味深くかつおもしろく読んだ。当時の仏像彫刻の事情や背景もわかり、また東大寺が平清盛により大仏殿が焼け、その復興のために悲願をかけた重源という人物の奮闘も浮かび上がってきて、時代の動きもよくわかる。重源の様々な悪戦苦闘の上に実現した、仏閣復興の動きが背後に流れていて、当時の宗教のダイナミズムの一端に触れつつ、鎌倉仏像の彫刻創造のパワーが伝わってくる。鎌倉にも快慶の彫像があり、それらが仏像制作を依頼する願主によって招かれ、船で運ばれてきたり、またその地に留まって仏像を完成させたりする制作の有様も間接的に伝わってくる。鎌倉仏教のダイナミズムが、仏像制作を通して窺えるし、戦乱を乗り越える新し

い時代の模様も映っている。これはまじめに歩くことを躊躇しない一つの情熱の賜物だろう。できれば、ここに、それぞれの仏像の写真を添えてもらえれば、もっと具体的でわかりやすくなる。また、謎に包まれたこの快慶という一代の人間像をもっとビビッドに浮かび上がらせてもらえば、さらによかっただろう。推薦作。

「旅立ちの切符」(友修二)は出だしは山口百恵の「いい日旅立ち」の歌詞でいたらないが、あたたかい思いやりが何か信頼として未来へつながる。「幸福駅」への切符のラストはいい。準優秀作。

西田信博「野菊と南天と」は、夏目漱石を軸に当時を生き生きと蘇らせた明治小説。その頃のことを様々な登場人物で賑やかに再生される。よく読んで調べてあるし、長塚節の借金の無心も面白い。その生動は楽しめる。準優秀作。

作家集団「塊」プロ作家による
作品 添削講評

文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ!
八覚正夫(新潮新人賞)・大高雅博(群像新人長編小説賞)・都築隆広(文學界新人賞)・小浜清志(文學界新人賞)・五十嵐勉(群像新人長編小説賞)

「文芸思潮」の読者にはメンバーが特別料金で指導いたします。

あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩		小説	
1篇 A4用紙2枚以内	3000円	1篇 20枚まで	7000円
エッセイ		50枚まで	10000円
1篇 5枚以内	5000円	100枚まで	15000円
10枚以内	6000円	200枚まで	20000円

●ご希望の作家と面談指導も可能です。

●ご希望の方には案内書を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。

作家集団「塊」事務局

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

bungeisc@asiawave.co.jp